

人類の課題に新たな
〈知〉をもって挑む



Graduate School of **CoreEthics** and Frontier Sciences

「核心としての倫理」(Core Ethics) を
軸に、**公共、生命、共生、表象**の四つ
のテーマのもと、新しい研究領域を創出
します。

立命館大学大学院 先端総合学術研究科 (2024 年度)

<http://www.r-gscefs.jp/>

先端総合学術研究科の教育理念

先端総合学術研究科先端総合学術専攻は、現代の諸科学分野に共有された主題群を「プロジェクト研究」によって追求することを通じて、新たな研究領域の創出を担う先端的で総合的な知の探求者、制作者としての研究者を養成することを目的としています。

本研究科は、先端的なテーマを総合的に研究し、研究者を養成するために、2003年4月に一貫制博士課程の独立研究科として開設されました。本研究科では「21世紀における公共性」（以下「公共」）、「争点としての生命」（以下「生命」）、「共生の可能性と限界」（以下「共生」）、「表象文化における伝統と技術」（以下「表象」）の4テーマ領域を設定し、「善き生のための再構築」を目指してきました。これらのテーマ領域の設定は、各領域の規定に共通する問いの源泉として「核心としての倫理（CoreEthics）」を置かたちで、研究科全体の教育目的そこに収斂させるような工夫をカリキュラムに反映させています。

人材育成目的と先端総合学術研究科の3ポリシー

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）

学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）

教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）



一貫制のプロジェクト型大学院

——ディシプリンからテーマへの転換

1 特色

多様なプロジェクトが織りなす新しい大学院教育

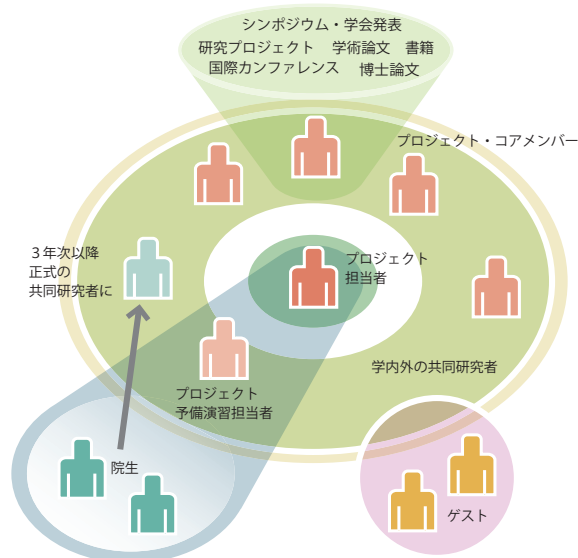
立命館大学の研究所・センター群は、学生が教員とともに課題とテーマを設定し学術研究を進展させるプロジェクト研究によって多くの成果を上げてきました。先端総合学術研究科は大学院教育とプロジェクト研究を結びつけることで、ディシプリンを横断し現代社会の要請に応じられる研究者の養成を行います。

カリキュラムは、①アカデミック・リーディングを学ぶ「基礎共通科目」、②4つのテーマ領域の専門知識を学ぶ「基礎専門科目」、③研究のアウトプット方法や倫理を学ぶ「サポート科目」、④テーマ領域ごとの研究の実践的な発表・討議の場となる「演習科目」に分かれています。プロジェクト型の教育・研究システムでは、各教員の「個別プロジェクト」が全科目の運営に反映され、専門分野のディシプリンにそって個別具体的に学ぶのではなく、テーマを横断した知を得られることが特徴です。

それ以外に、合同研究会やフィールド調査など、教員や院生の自主的・個別的なプロジェクト形成を通じて、新たな研究の潮流を生み出すことを目標とします。また研究会は専任教員を中心に学内外の第一線の研究者たち、さらにそのときどきのゲスト参加者を交えて開催され、研究ネットワークを形成します。

院生は、1、2年次には研究の基礎的な力を身につける勉強をしながら、こうした研究会やプロジェクトに参加します。1、2年次に履修する「プロジェクト予備演習Ⅰ・Ⅱ」は、各テーマ領域やプロジェクトに密接に関連した専門知識を有する教員のもとで、基礎的な研究手法を身につける科目です。2年次秋学期以降にはプロジェクト担当者である専任教員が受け持つ「プロジェクト予備演習Ⅲ」も加わり、博士予備論文に取り組みます。

博士予備論文の審査に合格すると、その院生は正式な共同研究者として、プロジェクト研究そのものの運営にあたって中核的な役割を果たすことになります。すなわち、計画的に研究を推進する日々の活動の一翼を担いつつ、研究会や学外の諸学会等における成果発表を着実に積み重ねていくことになるのです。



一貫制博士課程

前期課程相当

1回生 2回生

- ・博士予備論文構想発表会発表
- ・博士予備論文合格
- ・30単位取得

2年以上在学した者が、所定の単位を修得し、修士論文の審査に合格した上で退学する場合に修士学位を授与することがあります。

後期課程相当

3回生 4回生 5回生 ~

- ・博士論文構想発表会合格
- ・プロジェクト演習 8単位
- ・論文（査読付学術雑誌）3編以上掲載

博士論文提出

審査合格

博士号授与

3年次転入学※（修士号取得者）

※修士号取得者は入学時に24単位まで単位認定する場合があります。修士号取得以外の入学資格で入学した場合、1回生入学者と同様に本研究科で30単位以上単位修得する必要があります。

2 教員紹介

4つのテーマ領域で専任スタッフがディシプリンを超えて新しい研究領域を創出します

個人個人の日常的な生き方から、国家や共同体レベルの政策決定まで、さまざまな次元を視野に入れながら、わたしたちは、コア・エシックス（核心としての倫理）にふれる4つのテーマを選びました。そして、テーマごとに「科目としてのプロジェクト」が設置され、さらに各教員が中心になって運営する「個別プロジェクト」が設けられるのです。

公共

21世紀における公共性

身体をめぐる言説・運動・政策の変容過程を検討しつつ、断片的な生のあり方を拾いあげながら、デモクラシーと生存のための社会システムの公共性を探ります。

身体の現代・他——立岩真也

私は私の仕事を続けていけばいくことになっていきますが、以下はその一部でもあり、ただ自身でとてもできず、多くの人がいるとよいと思うこと。2017年度ようやく通った研究費応募書類の冒頭。「障害や病が訪れて人は身体の差異・変容を生きる。その人達を巡ってこの国でこの50年余りにあったことの大部分は、記録も考察もされていない。今後しばらくが最後の機会となる。気鋭の研究者の力と大学院生・修了者の参与を得て、研究を組織化し、以下を明らかにする。」続きはHP検索→「生存学」→「身体の現代——言説・運動・政策」。

医療・歴史・アーカイブズ——後藤基行

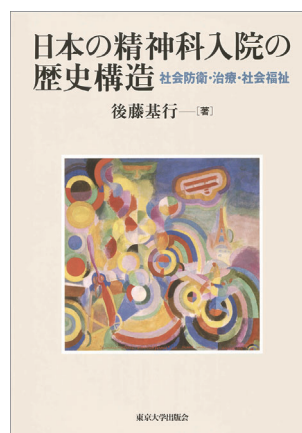
現代社会において医療は、人間にとって不可欠なシステムである。しかしながら医療は、純粋な医療の要請からのみならず、人々の生活上の要求、政治やあるいは社会的恐怖からも制度化されることがある。医療と福祉や救済、社会防衛との接近である。医療の「公共性」を考えるためには、医療の先端的なイメージにとらわれるのではなく、医療のもつ歴史性を理解する必要がある。私は、歴史を深く知るためではなく、現代の問題の本質を把握するために歴史を知りたい。そのために医療者や行政、患者が作成した資料が必要だが、日本の医療アーカイブズは貧弱である。資料を残しながら研究する方法論を制度化していきたい。



立岩真也
社会学・障害学



後藤基行
歴史社会学・精神医療史





小泉義之
哲学・倫理学



松原洋子
科学史・科学技術論



美馬達哉
医療社会学

生命

争点としての生命

生命科学・医療・福祉をめぐる科学的知識・技術の歴史的検討、倫理的諸問題の整理を通じて、生命・生殖・病・死を総合的に探求し、新しい生命の理解と倫理の構築可能性をひらきます。

生命論の理論的争点——小泉義之

哲学・倫理学を基礎に、小泉が中心となって、近現代において生命と生物が理論的にどのように認識され、文化的にどのように表象されてきたのかを整理して、新しい生命論を展望する。また、現代生物学がいかなる理論的課題に直面し、現代文化がいかに生と死を表象しているかを整理し、生命と生殖と病と死について総合的に探究する。そして、現代的な生物観ひいては人間観を構築することを目標とする。

生命と技術の倫理——松原洋子

科学史・科学技術論を基礎に、松原が中心となって、生命科学・医療・福祉に関する科学的知識および科学技術をめぐる諸問題について広範な資料収集をおこない、適切な研究法を探究する。個体レベルでの生命の保持や能力の増進、次世代に関わる生殖や出生の管理、個体間での生体組織・機能や情報の交換、個と全体の関係が問われる人口・生態系・進化など、様々な位相に注目しながら、科学と技術の抱える問題を、整理・検討する。そして、こうした問題に接近するための生命論と、あるべき新しい倫理の構築をこころみる。

医療・身体性・グローバリゼーション・思想——美馬達哉

人間の身体は、私的な領域に属しているだけでなく、現代社会においては、バイオテクノロジーによって人格と切り離された独自存在—臓器やiPS細胞など—として公的領域のなかに組み込まれつつある。こうした意味で、身体と公共という論点は現代社会において重要である。今後の研究計画としては以下を考えている。

1. フーコーの権力論を批判的に継承しつつ、リスクに着目して、現代のグローバリゼーション状況のもとで身体性がどう変容しつつあるかを分析していく。
2. 医師という経歴を生かして、理系と文系の両方の分野を横断的に取り扱って、公共性を再考していく。
3. 脳可塑性の臨床応用とその社会的含意について、オシロロジーの観点から検討していく。





阿部朋恒
文化人類学



小川さやか
文化人類学・アフリカ地域研究



西成彦
比較文学

共生

共生の可能性と限界

多大な犠牲をともなう不完全な共生実験であった人間の歴史を批判的に遡りつつ、未来に向けて、そうした犠牲を伴わない生命と生活の可能性を構築する方途を探ります。

フィールドスタディの拡張——阿部朋恒

まだ見ぬ出会いを求め歩き、身をもって知り得たことを言葉にする。文化人類学の核心には、常にこのようなきわめて単純かつ魅力的な営為があった。

そこで培われてきた方法から出発し、ここではフィールドに赴くことの意味と、そこから生まれる学びの可能性を幅広く探求する。私たちがコロナ禍のもとで過ごした時間、またその間に社会に実装された新たな情報技術や流通システムは、他者とのつながりをめぐる感覚と常識に変更を迫るだろう。現在進行形のこの変化を味方につけ、新たなフィールド学を構想していく。

狡知、Living For Today、新しい経済文化の人類学的探求——小川さやか

文化人類学を基礎に小川が中心となって、世界各地の同時代を生きる人々の日常的でミクロな営みから、他者と共によりよく生きるための仕組みや知恵、新しい人間観・世界観を探求する。とりわけ、アジア・アフリカ諸国のインフォーマル経済とそこで働く知恵（狡知）、多様な「その日暮らし」のあり方と、ブロックチェーンやシェアリング経済をめぐる思想とを重ね合わせ、新自由主義的な経済システムや未来優位の時間の観念、生産主義的で自立的な主体観に縛られた私たちの生のあり方を相対化し、ひとつではない多様な生のあり方を構想する。

カタストロフィと文学——西成彦

人類の歴史はかずかずの「災厄」に彩られてきた。自然災害であれ、戦争や人災であれ、災害はけっして一様にひとに襲いかかってくるわけではない。しかも、加害者側に立って責任を引き受けなければならないことが往々にしてある。そうしたなかで、「カタストロフ」の危険にさらされてきたひとびと、および、そこに加害者・傍観者として関わってしまったひとびとの経験と記憶は、その一部が「記録」に残されるが、それでも足りない部分は「文学的な想像力」にゆだねるしかない。文学の可能性と限界を考える。



第8回 河合隼雄学芸賞受賞
第51回 大宅壮一ノンフィクション賞受賞



第70回 読売文学賞〈随筆・紀行賞〉受賞



竹中悠美
芸術学



千葉雅也
哲学・表象文化論



マーティン・ロート
ゲーム・デジタルカルチャー

表象

文化と芸術の表象論的分析

文化と芸術の諸事象を表象論的観点から読解・分析します。技術、歴史、思想、実践への理解を主軸とし、創造と受容の場、諸々の文脈、メディアといった問題系へとアプローチします。

社会におけるアートの作用機序——竹中悠美

芸術学を基礎に置き、社会の中でアートに託された機能とそれを実践するための制度的・技術的システムを検討する。アートがパブリックな文化財として「消費」される現代の資本主義社会において、われわれとアートを取りもつたシステムは美術館やアートセンターという場所と情報メディアである。そこで、展覧会、アートプロジェクト、文化政策が企図する文化活動の方法と課題、およびメディアにおけるその扱いを検証することによって、アートの意義を問い直す。

現代哲学と批評のあいだで思考する——千葉雅也

表象文化の多様なケースを併せて考察するために、現代哲学を媒介として芸術・文化・社会・欲望の諸理論を交流させ、そして、領域横断的な論述の方法、および批評的なスタイルの修辞学を検討する。人間＝私たちを特権化しない「ものごと」の存在論・形而上学と連動して展開される表象論を目指し、これを、現代のテクノロジー状況——それは人間性をめぐる常識・良識を変容させざるをえないだろう——に応じた「人文学への批評」の一環として提示していく。

ゲーム・デジタルメディアを探検する——マーティン・ロート

遊びとデジタル技術が組み合わされることにより生まれる表現空間・インタラクティブ空間の可能性と限界を検討する。日本のゲームを中心に、その空間においてどのような想像力・文化が発生し、あるいは現代社会の諸問題がどのように表出し、議論され、解決方法が探られているかを批判的に分析する。そのためには各空間に触れると同時に、これらの空間の社会的・経済的・技術的・制度的な背景を理解する必要がある。表象文化のみならず、現代社会は、デジタル技術により大きく変化しつつある。ゲーム・プラットフォーム・デジタルメディア空間はその変化を考えるための一つの鍵となるはずだ。



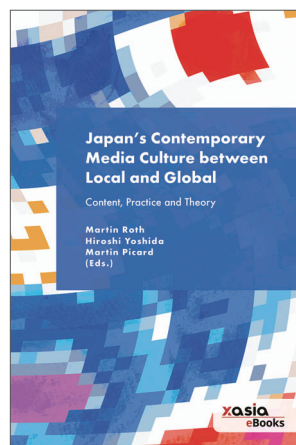
現代思想入門 千葉雅也

人生が変わる哲学。



現代思想の真髄を
かつてない仕方
で書き尽くした
「入門書」の決定版

新書大賞2023受賞



充実した研究支援体制

ライティング指導室（創思館 307）には、研究指導助手と英語論文指導スタッフが常駐しており、以下の業務を行っています。

- 日本語論文の書き方および添削指導（研究指導助手・日本語論文指導スタッフ）。
- 英語論文の書き方および添削指導（英語論文指導スタッフ）。
- 先端総合学術研究科主催のシンポジウム・研究会の企画・運営に関わる業務。
- 『Core Ethics』（研究科紀要）の編集、研究科彙報の編集、研究科 Web サイトの管理、院生プロジェクトの運営の支援など。
- 日本学術振興会特別研究員等申請書作成のサポート。

また本研究科の博士論文の閲覧受付、図書・備品の貸し出し、『Core Ethics』・彙報の配布等も同室にて実施しています。

院生のための奨学金・研究活動助成制度（大学全体の制度は大学 HP＜大学院キャリアパス推進室＞を参照のこと）

立命館大学での奨学金・研究助成制度（QR コードから参照してください）

1) 一貫制博士課程 1.2 回生
(博士課程前期課程相当)



主なもの

- 1 年次対象成績優秀者奨学金（年額 10 万円）
- 2 年次対象成績優秀者奨学金（年額 10 万円）
- 大学院博士課程前期課程学生会奨学金
- 大学院博士課程前期課程研究実践活動補助金
- 大学院家計急変奨学金
- 日本学生支援機構大学院在学生対象奨学金、等

2) 一貫制博士課程 3 ～ 5 回生
(博士課程後期課程相当)



主なもの

- 研究奨励奨学金
S（年額 50 万円）、A（年額 50 万円）、B（年額 25 万円）
- 後期課程学生会奨学金
- 博士課程院生研究支援奨学金（新設）
- 研究会活動支援制度
- 博士論文出版助成制度
- 日本学生支援機構大学院在学生対象奨学金、等

研究者としてのキャリアパス支援

①日本学術振興会特別研究員 (DC1、DC2) 【在校生】

採用されることが一つのキャリアとなる日本学術振興会特別研究員【国の研究者養成制度。月額20万円の研究奨励金が支給されます。DC1（3～5回生の3か年）DC2（4～5回生の2か年）】に多くの院生が採用されています。※2023年度の採用率は25.0%であり、全国平均の20%を上回っています。

この特別研究員に採用された場合は本学の研究奨励奨学金Sも合わせて支給され、学費額相当分（年額50万円）を受給できます。それらを合わせると年額290万円もの支援を受けることができます。先端研はこの特別研究員に採用されている人数が本学の中で最も多いため、研究奨励奨学金S受給者も最も多くなっています。（今年度は11名）

2017 年度	2 名
2018 年度	4 名
2019 年度	2 名
2020 年度	3 名
2021 年度	4 名
2022 年度	5 名

②NEXT 学生フェロー、RARA 学生フェロー（2021 年度に設立）

NEXT 学生フェローは、優秀で意欲のある博士課程後期課程学生に対して、研究専念支援金（年額 216 万円）・研究費（年額 34 万円＜上限＞）の支給と学際的で先端的な研究に専念できる環境を提供することにより、後期課程修了時まで高度専門人財としての資質を獲得することを支援します。「NEXT 学生フェロー」が博士課程後期課程の3年間を通じて獲得をめざす力は、研究力 + 企業等でも活躍できる力（トランスファラブルスキル）です。

RARA 学生フェローは、優秀で意欲のある博士課程後期課程学生に対して、研究活動支援金（年額 216 万円）・研究費（年額 34 万円＜上限＞）の支給と立命館先進研究アカデミー（Ritsumeikan Advanced Research Academy；RARA）をフィールドに、育成を行います。「RARA 学生フェロー」は、国際社会で活躍できる資質と能力を身に付けることを目標としています。

本研究科の採用者 (2023 年度現在)
NEXT 学生フェロー 3 名
RARA 学生フェロー 2 名

現時点で①、②の制度等を利用し、先端研全体で合わせて 16 名（3 ～ 5 回生在学者の 25%）の院生が年額 200 万円以上の返還不要の奨励金・支援金、これに加えて研究費等を得て経済的に不安を抱えることなく研究活動を送っています。

研究者としてのキャリア

①衣笠総合研究機構専門研究員採択者数 (修了生)

2017年度3名
2019年度2名
2020年度2名
2021年度1名
2022年度2名
2023年度3名

②大学院高度化施策初任研究員採択者数 (修了生)

2019年度1名
2020年度3名

主な就職先 (アカデミックポスト以外も含む)

青森県立保健大学、岩手大学、大阪公立大学、大阪国際工科専門職大学、大阪樟蔭女子大学、大阪大学、大谷大学、岡山医療専門職大学、沖縄愛楽園交流会館、神奈川大学、金沢大学、中国・河北経貿大学、韓国・光州大学、韓国保険社会研究院、韓国ルーゲーリック病(ALS)協会、関西大学、狂言師、京都看護大学、京都芸術大学、京都光華女子大学、京都産業大学、京都中央看護保険大学校、京都府立医科大学、公益財団法人稲盛財団学術部、台湾・康寧大学、神戸学院大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸大学、国立国会図書館、国立障害者リハビリテーションセンター、国立民族学博物館、滋賀医科大学、滋賀県立大学、滋賀県立美術館、静岡大学、四天王寺大学、湘南医療大学、世界人権問題研究センター、中国・大連工業大学、宝塚大学、千葉県千葉リハビリテーションセンター、千葉商科大学、中央大学、中京大学、中部大学、筑波学院大学、鶴見大学、帝京大学、東京藝術大学、東京女子医科大、東京福祉大学、東京薬科大学、国立情報学研究所、同志社大学、長野大学、名古屋市立大学、南山大学、京都市立芸術大学、日本社会事業大学、日本大学、日本福祉大学、羽衣国際大学、花園大学、姫路大学、兵庫医科大学、広島修道大学、福岡教育大学、佛教大学、台湾・文藻外国語大学、韓国・ペクソク大学、三重県立看護大学、宮城学院女子大学、桃山学院大学、大和大学白鳳短期大学部、山梨大学、有限会社ケアサポートモモ、立命館大学、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院、早稲田大学 等

博士論文などをもとにした書籍の刊行

受賞作・2022年以降に刊行された書籍の一部

川口有美子(2012年度修了)第41回大宅壮一ノンフィクション賞、
『逝かない身体:ALS的日常生活を生きる』(2009年、医学書院)

川端美季(2011年度修了)第2回法政大学出版局学術図書刊行助成、
『近代日本の公衆浴場運動』(2016年、法政大学出版局)

山本由美子(2012年度修了)第1回生存学奨励賞審査員特別賞、
『死産児になる:フランスから読み解く「死にゆく胎児」と生命倫理』(2015年、生活書院)

由井秀樹(2013年度修了)2015年度 日本科学史学会学術奨励賞、
『人工授精の近代:戦後の「家族」と医療・技術』(2015年、青弓社)

矢野亮(2014年度修了)第2回生存学奨励賞、
『しかし、誰が、どのように、分配してきたのか:同和政策・地域有力者・都市大阪』(2016年、洛北出版)

萩原由加里(2009年度修了)日本アニメーション学会奨励賞 2016、第13回木村重信民族芸術学会賞、
『政岡憲三とその時代:「日本アニメーションの父」の戦前と戦後』(2015年、青弓社)

小西真理子(2013年度修了)第4回生存学奨励賞、
『共依存の倫理:必要とされることを渴望する人びと』(2017年、晃洋書房)

